

面 生 新

「水俣病県民会議」が発足した。正式名称は「水俣病訴訟支援・公害をなくする県民会議」である。さんで字の通り、患者の訴訟支援

と公害反対運動の展開がその目的である▼周知のように水俣病患者は百十一人（うち死亡四十二人）で九十世帯。この中で六十一世帯は補償問題を政府の調停にゆだねることになったが、残る二十九世帯はこれを断わり、訴訟に持ち込むことになった。県民会議はこの訴訟派を全面的に支援しようというものである▼ふり返ってみれば、水俣病の最初の患者が発生してから十六年。熊本医学部研究班が、水俣病はチツソ工場の廃液に含まれる有機水銀が原因であると断定してから六年たつ。裁判ともなれば、補償問題の結論が出るまでに数年はかかるだろう。患者の心情に思いをはせると感慨なきを得ない▼発会式では裁判にまで追い込まれた患者に対する「白い目」が今もなくなっていないことが述べられた。さまざまの中傷やデマが飛んでいることも伝えられた。患者を取り巻く世間の風は、冷たくまた無理解であるように思われる▼水俣病が破壊したのは、患者の生活だけではないらしい。水俣病の原因究明をめぐり、工場にたよる経済に生きる町の人々と患者の周辺で、不信と反目が生まれて久しい。いわゆる人間公害なるものは、いまなお繰り返されているわけだ▼患者やその家庭は、社会の弱者である。調停、訴訟いずれの道を選ぼうと、それは政治やイデオロギーの面でみるのは、当を得ていないし、両派の支援に政党エゴイズムを持ち込むのも、もちろん間違っている▼患者に松永久美子という十八歳の女性がいる。赤い日ガサをほしがり、入学する喜びをいっぱいに成長したのだったが、病魔は彼女を十三年にわたって無意識のまま、少女の状態でベッドに埋もれさせている。目も見えず、耳も聞こえず、毎日口にするミネラルウォーターが唯一の命の綱という▼彼女たちは患者が訴えているのは、人間の生きる権利であり、告発しているのは公害の黒い恐怖であるまいか。人間の尊厳は政党政派、主義主張を越え、人道的立ち場から打ち立てられねばならぬ。水俣病を考える原点もここにある。